

# 民夫、お母さん



転載・二次使用禁止

6月のある火曜日。午後3時半、水口芳江さん(56才)は自宅からほど近い通りの一角に立ち、息子の帰りを待っていた。

「ほら、あのバスですよ」

近づいて来るバスを指さし、

芳江さんは微笑んだ。毎週火曜日は息子の民夫さん(35才)が通所施設に通う日である。しばらくすると、芳江さんの目の前にバスが止まった。大きな窓ガラス越しに車椅子に乗った民夫さんの姿が見える。後部のドア

が開くと、民夫さんは車椅子のまま、リフトで降りてきた。はしゃいでいた。カメラを向けると、いっそうはしゃぎだした。「きつとうれしいんですよ。あの子、人と話すのが好きだから(笑い)」

屋根つきの車庫に面した民夫さんの部屋の入り口には、車椅子のまま出入りできるリフトが付いている。室内には介護用ベッド、洗面所、立てかけて収納できるバスタブ、給湯器などが備わっている。これらの機器は、在宅介護のために芳江さんが考え、設置したもので、民夫さんの食事、風呂の介助、シーツ類の洗濯など一切合切の用事ができる機能的な生活空間でもある。

民夫さんは19年前、オートバイによる交通事故で、約2年もの間、植物状態にあった。その後、芳江さんの献身的な介護で奇跡的に回復したが、後遺症として、四肢体幹機能障害が残った。首から上、右手、右足はわずかに動かせるが、食事、入浴などはすべて介助が必要である。言葉は話せないが、芳江さんが「あ、か、さ、た、な……」と五十音順に発音し、該当する語句に民夫さんが右手で合図し、コミュニケーションをとることがができる。たとえば「テレビが見たい」というときは、「あ、か、さ、た」の「た」の部分で民夫さんの右手が反応するので、た行であることがわかり、次に「た、ち、つ、て」の「て」部分

交通事故で16才長男が  
脳に障害、植物状態に！  
病院から追われ、  
保険会社は嘘をつき、  
加害者とは裁判。  
闘い続けた19年

は

16才の秋、バイク事故で生死の境をさまよった長男さん。眠り続ける息子の傍らで、母は闘りかけ続けた。

転載・二次使用禁止

あきらめない」

植物状態に陥ると、病院にいても特別な治療などなく、そのまま眠り続けて一生を終える人も少なくない。彼も、2年以上意識が戻らず、医師たちからも見放され、病院も転々とさせられた。しかし、一縷の望みを捨てず、母は19年間ひとり闘った。そして奇跡が――

民夫さんの入院中、芳江さんは祝日、正月も関係なく毎日通い、献身的に介護し続けた。



すっかりしたりハビリをするということですが、それでは保険点数がほとんど付かない。経営面から見ても、退院してもらおうということになってしまふ」

芳江さんは、次男が以前に世話になった大病院の小児科医を思い出し、8年ぶりに電話を入れた。「脳神経外科とも相談してみますが、こちらへいらつしやい」との返事に芳江さんは、ほっと胸を撫で下ろした。今度の病院は、個室を用意してくれ

民夫は抵抗力が弱くなっている、万が一のことを考えてすべて手洗いしました」

違ひなく見ている。私の言葉が、たしかに分かつてくれている。うつろでも何でも、写真機を見ているのはたしかだ。元氣を出せよ」

「医師からは、こういふ状態の患者さんは、ほとんど1年以内に亡くなってしまふんです」と告げられました。ある看護師さんからは、もう、お母さん、ここまでやったのだから、いいでしょう、といわれて、言葉も出ませんでした。いいでしょうといわれて、ああそうですかという話になりませんよね。何でもこれで終わりのなっと思っじやないですか」

## 「民夫が笑った!」

しかもその間、さらに大きな問題が芳江さんの前に立ちました。民夫さんの事故は、自動車保険(自賠責保険)がおりなかった。その上、任意保険を掛けていた代理店が掛け金を着服し、保険会社に支払っていないが、入院費用も支払ってもらえない。芳江さんは、保管していた領収書を見せ、抗議したが、保険会社側は支払いを拒否した。

「自賠責の男性からの連絡は一切ありませんでした。どうしても納得できなくて、どれだけ民夫が大変な思いをしているのか、どんな姿になったのか見てくれ」と何度もいったら、やっと奥さんと一緒に来たんです」

「すつと38度以上の熱がありましたが、氷枕の交換が終わると、洗濯です。大汗をかくので山のような洗濯物が出るんです。病院に洗濯機はありませんが、民夫は抵抗力が弱くなっている、万が一のことを考えてすべて手洗いしました」

「夫は果然と立ち尽くすだけで、謝罪の言葉はなかつた。翌日、「何かお手伝いさせてください」と妻がひとり訪ねてきたので、洗濯物を頼んでみたが3日目には「手で洗ったことがないから、赤くなっちゃった」といわれた。

「夫には、(民事裁判を起こして)お前そんなに金が欲しいのかっていわれましたが、何も恥じることはないでしょう。目撃した人の証言もあって裁判では勝訴しましたが、相手のかたの事情もあり、20年間月々いくらかの補償をするということを決着しました」

事故から1年3か月、民夫さんの目だけは動いていたが、意識は戻らなかつた。そして再び転院を告げられ、芳江さんの病院探しが始まる。保健所に連絡し、民夫さんの病状を説明、都内だけではなく関東近隣の病院を教えてもらい、見込みのありそうな病院を自身の足で探し歩いた。思いやりのなさに怒りをおぼえた病院もあった。

「受付の人に、大病院で駄目ついでいわたんでしよう。何でうちに来るの、植物状態なんですよ」といわれたんです。その後、ちょっと待ってください、といいついて奥でスタッフと話しているのが聞こえたんですが、あまりにもその対応が悔しくて、こんな情のないところへ民夫を預けられないって思つて。わざと大きな声で、ありがとうござ

「受付の人に、大病院で駄目ついでいわたんでしよう。何でうちに来るの、植物状態なんですよ」といわれたんです。その後、ちょっと待ってください、といいついて奥でスタッフと話しているのが聞こえたんですが、あまりにもその対応が悔しくて、こんな情のないところへ民夫を預けられないって思つて。わざと大きな声で、ありがとうござ

病院で療法士が行うリハビリを、芳江さんは見もつ見えなで覚えてきた。

事故に遭う前の民夫さん。空手を習い、スポーツが好きで、世話の掛けない少年だった。

で反応すれば、最初の語句が「て」であることがわかる。そして次は「は、ま、や、ら」の「ら」で合図、さらに「ら、り、る、れ」の「れ」で合図する……といった具合。

通所とリハビリ通院のときだけ外出の支度や送迎の手伝いに来てくれるヘルパーに車椅子を押され、民夫さんは部屋にはいつて来た。芳江さんは、カップ

## 「お母さんの顔がわかるようになるかな」

小学校から空手を始め、スポーツが大好きだった民夫さんは、高校2年の6月にオートバイの免許を取った。

「活発でしたけど、手がかららない子供でした。一緒に買い物に行くと、いつの間にか私の荷物を持っていたり、洗濯、お風呂の掃除も嫌がらずにやってくれました」

事故が起きたのは、その4か月後、'86年10月8日のことだった。芳江さんが夕方、仕事から戻ると、台所に民夫さんの姿があった。

「どうしたの？」  
「うん、ラーメン作ってるんだ」「すぐに晩ご飯作るから、待つてて」

「ごめん、待つてられないんだ」その日、友人との約束があり、民夫さんは、ラーメンを食べると400ccのオートバイで家を出た。芳江さんは笑って送り出

に入れた牛乳を民夫さんの口に運ぶ。

「子供のころから牛乳が大好きなんです。一日で3リットル、平気で飲んでましたから」牛乳を飲むたびに、民夫さんは、底抜けに明るい笑顔を見せる。

まさかこんな日が訪れるとは——息子の笑顔に芳江さんは、喜びを実感せずにはいられない。

した。

バス通りを走行していた民夫さんの目の前に、突然、一時停止を怠り、道路を横断しようとした自転車が飛び出してきたのは、午後8時過ぎのことだった。自転車はオートバイと衝突した。



通所からバスで自宅に戻ってきた民夫さんを、芳江さんは出迎える。

民夫さんの体は宙に投げ出され、ガードレールに右腕をぶつけた後、頭から地面に落ちた。オートバイは、横倒しのままバス通りを滑走した。自転車に乗った男性は、大きな怪我もなく、そ



ヘルパーに車椅子を押され、帰宅する。

の場から逃げ去った。

「おぼさん！ 大変だよ、民夫くんが、民夫くんが……」

民夫さんの友人から事故の知らせを受けた芳江さんは、サンダル履きのまま家を飛び出した。その友人に導かれて事故現場に着くと、すでに人垣ができていた。不吉に点滅するパトカーの赤いランプが芳江さんの顔を照らした。

「揺り動かすなんてどうでもない。首の骨が折れ

ているかもしれないというので、すぐには救急車に乗せられなかったんです。テレビのドラマのように叫び声もなにも……声なんて、まったく出ませんでした」芳江さんは、呆然と立ち尽くすだけだった。あいにく周辺病院のICU（集中治療室）はすべて塞がっており、救急車は数十キロ先の大学病院に向かった。

「脈拍38！」「脈拍15！」民夫さんの脈拍は、低下する一方だった。

「お母さん、足、押さえていてくださいっていわれたんですが、冷たくなっていくんですよ、民夫の足が……」

民夫さんの意識はまったくなかった。大学病院に到着、すぐにCT撮影をした結果、障害が脳の広範囲に及び、手術ができる状態ではないと判断された。

「医師の説明を受けたんですが、最初は覚えていないんです。父には連絡しようと思ったんですが、できなくて。私は5人姉妹の真ん中で、民夫は父にとって初めての男の孫でした。目の中に入れても痛くないくらいかわいがってましたから。それで姉に電話を入れて、民夫が死んじゃうよ！ って叫んで受話器を切った覚えがあります」

民夫さんは、生命維持装置を付けたままICUで深く、静かに眠っていた。その日から2週間、待合室のソファが芳江さん

のベッド代わりになった。民夫さんに面会できるのは、朝夕の1日3回のみ。当時小学校5年生だった民夫さんの妹と中学校2年生の弟は、芳江さんの両親や民夫さんの友人が面会をみてくれた。

「1週間後、お母さんの顔がわかるようになるかな……」と医師から説明を受け、愕然としました。つまり、ずっと植物状態のままかもしれないということでした」

自発呼吸はあったが、医師の言葉通り意識は戻らず、高熱が続いた。膠着状態のまま、1か月が過ぎようとしていたある日のこと。

「お宅で知っている病院があれば、そちらへ転院していただけないでしょうか。もし知らなければこちらで紹介しますが」と、病院側からいい渡された。「命は助かったけど、これ以上積極的な治療はできないし、ICUにもいられませんということでした。そういわれたら、出なければならぬのかなって思いますよね」

山口クリニックス院長（脳神経外科）で、交通事故被害者家族とも交流の深い山口研一氏は次のように説明する。

「遷延性意識障害、つまり植物状態のかたは全国に2万〜3万人いるといわれていますが、医療的な措置は、ほとんどないのが現状です。病院としてできるのは、食事をきちんと与えて、

# わ 時代の

見よう見まねで覚えたOT（作業療法士）じみたことを毎日私がやるものだから、看護師長さんに「もう少し私たちを信用してもらえませんか、ついでにわれました（笑）」

それ以来、民夫さんにとって芳江さんが押す車椅子で療護センターのすぐ側にある海に出かけることが楽しみになった。

「お昼の12時ごろ昼食を食べさせるんです。食べ終わるのは午後1時、1時間近くかかるんですね。ひと休みしてから外出して、帰ってきてからマットに乗せて1時間ぐらゐ運動させるんです。最後におやつを食べさせて、歯を磨いたり、ひと通り終わったら帰るんです。なかにはお見舞いに来て、ただ顔を見てきただけで終わる人もいます。マッサージしたり、汗を拭いてあげたりとか、そういうことひとつにしても、気がつかなければ、それまでですよ」

意識が戻ってから約4か月後、今度は右足でイエス・ノーの合図ができるようになった。月2回のPT（理学療法士）、週2回のST（言語聴覚士）によるリハビリも見よう見まねで覚えた芳江さんは、それを毎日のように民夫さんに行っていた。

その成果も表れ、「あ、か、さ、た、な」の会話も可能になった。月に1度は、行政が貸し出す車椅子用のワンボックスカ



「先天性障害者に比べ、中途障害者の場合は、ほとんど行政の援助がないに等しいんです。ですから、自分たちで働きかけていくしかない。支援制度にしても、向こうから教えてくれるわけではないので、こちらから調べる以外に方法はないんです」

1に民夫さんに乗せて、動物公園や臨海公園に出かけた。友人と一緒にいちご狩りや、ミュージカルや映画を見にも出かけた。'95年10月23日付の療護センターの発行した小冊子に民夫さんがワープロで綴った文章がある。「オレはバイクの事故でけがをして入院した

入院中も芳江さんが車を運転するなどして外出。退院後の'01年にはねぶた祭りにも参加



気がついたら声が出なかった自分で御飯が食べられなかった手足が曲がってしまっただけどオレは生きてよかった自分の口でまた御飯が食べられてよかった

安定した日々が続いていたある日のこと。突然、療護センターから「制度が変わったので、入院中の患者は退院してほしい」と告げられた。しかも、その日を境にリハビリや言語療法の治療もなくなった。当然、納得できなかった芳江さんは関係各所に掛け合ったが、結果は変わらなかった。「施設を探してください」という療護センターからの申し渡に、芳江さんは東京都内の施設をいくつか巡ってみた。

「いま申し込んでも入所できるのは10年後になります」職員への返答に芳江さんは目を疑った。これまでわがままひと

家の仕事を、また手伝えるようになれればうれしいなあ（中略）リハビリをいっぱいして、はやく退院したいなあ

手にした芳江さんに涙はなかった。むしろ「生きてよかった」の一行に込められた息子の思いに、力強さと喜びを感じた。

「中途障害者にはほとんど行政の援助がない」

療護センターでの入院生活は、実に12年に及んだ。それなりに

警察庁によれば、'04年の交通事故発生件数は全国で約95万2000件、死傷者約119万人。うち重傷者数は、約7万人にのぼる。しかも、年齢別で見ると

重傷者約7万人のうち、16才から24才が約1万2000人とトップを占める。重い障害を負う若者も少なくない。しかし、彼らに対する支援は極めて乏しい。

「大変な患者を抱えているとは思えない」と笑顔を見せる。

「入院中に、他の家族の人から」

「大変な患者を抱えているとは思えない」と笑顔を見せる。



「現実を直視することも必要だが、嘆いてばかりもいけない。芳江さんは、可能な限りの打開策を模索した。ショートステイや重度心身障害者の施設利用が可能になる、東京都心身障害者センターで発行する「愛の手帳」の審査、高額な介護機器を贈入するための助成金の交渉、訪問

## 転



初めて一時帰宅した日は、友人や親戚が集まり、民夫さんの回復を祝った。

などの治療法を試みた。しかし、芳江さんの願いは叶わなかった。3か月後、担当医の紹介で移った病院は、まるで命を承らえるだけの施設としか、芳江さんの目には映らなかつた。

そんなある日のこと。

「民夫が笑った！」

奇跡が起こったのは、転院してから1か月後のことだつた。

これまで悲運に翻弄され続けてきた芳江さんを、神は見放さなかつた。ひとえに回復を信じ、決してあきらめなかつた芳江さんの思いが、やつと天に通じた。その場にいた療法士は、最初は

半信半疑だつた。療法士はそれを確かめるため、その当時流行っていた笑い袋を持つてきた。

民夫さんの頭上にかざし、大笑いをしてる人の絵が描いてある巾着状の袋を押し、笑い声を響かせた。すると、それに合わせて民夫さんも笑つた。何度も何度も確かめた。

「最初は、本当に笑っているのかわからなかつたんです。意識があつて笑っているのか、あるいは反応しているだけなのか。先生も私にも、でも、私には確信がありました。これは、本当に笑っているんだと」

「口を濡らすからね」と、ことあるごとに民夫さんに語りかけた。大好きだつたビートルズや映画「フットルース」のサウンドトラック、同級生の励ましの声を録音したカセットテープを聴かせ続けてきた。

「音楽を聴かせたり、話しかけたりと、脳に対して常に刺激を与え続けることが、そのときはあまり反応がなくても、半年あ

るいは1年後に、いい反応を示すということはあり得ると思

います。

正直、病院だけでは看護師やスタッフも忙しいので、そんなに頻繁に働きかけができない。半年間なり1年間なり絶え間なく働きかけるといふ、並大抵ではないご家族の努力があつたからではないでしょうか」(前出

・山口氏)

「オレは生きてよかった」

通い詰めた。

そして、事故から2年1か月後には、完全に意識が回復したことが確認された。母が来るのを待ちわびる民夫さんは、廊下に芳江さんの足音が響くと、首をひねって見るようになった。

「いままでの介護の経緯から、

88年7月、以前から入院を申請していた自動車事故専門の療

護センターに移ることになる。

芳江さんは何とか家計をやり繰りし、療護センターまでの半年分、約12万円の定期券を購入した。片道2時間、365日、日曜、祝日、正月も関係なく毎日

事故から、約1年半が過ぎていた。植物状態から1年を過ぎて意識が回復する例は、非常に少なく、奇跡に近いという。医師たちも、何が原因したのかわからなかつた。

芳江さんはそれまで、一日も欠かさず「マッサージをするからね」「口を濡らすからね」と、ことあるごとに民夫さんに語りかけた。大好きだつたビートルズや映画「フットルース」のサウンドトラック、同級生の励ましの声を録音したカセットテープを聴かせ続けてきた。

「音楽を聴かせたり、話しかけたりと、脳に対して常に刺激を与え続けることが、そのときはあまり反応がなくても、半年あ

るいは1年後に、いい反応を示すということはあり得ると思

います。

正直、病院だけでは看護師やスタッフも忙しいので、そんなに頻繁に働きかけができない。半年間なり1年間なり絶え間なく働きかけるといふ、並大抵ではないご家族の努力があつたからではないでしょうか」(前出

・山口氏)

「オレは生きてよかった」

通い詰めた。

そして、事故から2年1か月後には、完全に意識が回復したことが確認された。母が来るのを待ちわびる民夫さんは、廊下に芳江さんの足音が響くと、首をひねって見るようになった。

「いままでの介護の経緯から、

辛いことも多かった芳江さんの心は、この民夫さんの顔面の笑顔だという。



いました。失礼します！」といつて帰ってきました。4か所の病院を訪ね歩いた末、やっと受け入れてくれるという病院が見つかった。「これまで、やっていない治療法がうちにはあるから連れていらつしやい。ただし、3か月経過しても意識が戻らなかつたら出てもらうしかありません」芳江さんは3か月にすべてを託そうと思つた。高圧酸素療法

医療、訪問看護、訪問入浴サービスなどの手続きは、すべて芳江さんが行った。

できる限りの支援を整え、自宅のリフォームもようやく完成した90年、民夫さんが家に帰ってきた。これまで、民夫さんの介護にほとんど無関心だった夫とは、1年前に離婚した。水口さん夫婦は、民夫さんが事故に遭う半年前まで和菓子店を営んでいたが、事情があり、店をたたんだ。お互い違う仕事に就いた矢先の事故だった。

「商売をやっていたら、民夫の面倒もまともにみてあげられなかったと思います。何かこう、本当に道が敷かれていたような気がします」

現在、芳江さんは行政からの助成金や補償金などで暮らしを立て、民夫さんの介護を続けているが、永遠に介護を続けることは不可能だとわかっている。

「民夫にはよくいってあるんですよ。お母さんも年をとったら、みれなくなるよ。お母さんの目標としては、70才までみてあげるけど、それを過ぎたらもうみられなくなっちゃうからね。そうしたら、民夫は施設だよって」

医師からは半ばあきらめられ、度重なる転院も余儀なくされ、それでも「私はあきらめない」と、たったひとりで息子のために闘い、奇跡を起こした芳江さん。医療や福祉の壁にぶつかっても、決してあきらめず「息子に生きてほしい」という一念で

乗り越えてきた。その力強さは、一体、どこから来るのだろうか。「人に頼ったって、愚痴をこぼしたって、人が助けてくれるわけじゃない。誰かに愚痴を聞いてもらおうとしても、反対に愚痴られちゃうし。それじゃ愚痴をいってもしょうがないって、そういう気構えができちゃったんでしょね。病院にいるときに、ほかの患者の家族からいわれたことがあるんです。とてもそんな大変な患者を抱えているとは思えないって」

たくましく笑う芳江さんの表情が印象的だった。

民夫さんのいまの夢は、電動車椅子を購入し、これまで以上に自由に活動することだ。

「電動車椅子を見かけると、民夫が目で、それを追っているんです。やらせてあげたい、何とかならないかなって」

芳江さんの希望も膨らみ、150万円近くもする電動車椅子の資金調達のため、彼女はいまも奔走する。

こんなに毎日毎日愛する息子のためとはいえ、身を粉にして働く芳江さんに尋ねた。あなたが癒されるときはあるのですか――？

「民夫じゃないかしら。あの、大きな口をいっぱいに開けて笑う笑顔とか、そんなのが、ん、そんなのがいいんじゃないかしらね」

芳江さんには、どこまでも民夫さんしかなかった。